様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　 2 月　25 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2008～2009
課題番号：２０７２００４５
研究課題名（和文）
　戦中の〈ドイツ演劇〉、異文化圏でのその展開―演出家ピスカートアの亡命期の仕事
研究課題名（英文）
　The development of German theatre outside of Germany during World War II - the example of Erwin Piscator's work in his American exile

研究代表者
　　萩原　健　(HAGIWARA KEN)
　　明治大学・国際日本学部・講師
研究者番号：50409728

研究成果の概要（和文）：

　本研究では、従来の、戯曲作品中心で、ドイツ国内でのその展開を軸にした〈ドイツ演劇〉研究を問い直し、演出作品およびドイツ国外での動きに焦点を当て、戦前のドイツで活動した演出家ピスカートアの、第二次世界大戦中の亡命先、ソ・仏・米での活動を追究した。このうち、彼が校長を務めた米国の演劇学校での活動が最終的に主な研究対象となり、日本演劇学会の全国大会で二回発表、同学会誌に論文を一本発表することができた。

研究成果の概要（英文）：

While conventional research on German theatre often focuses on dramatic pieces staged in Germany, the aim of this research was to examine the works by German theatre director Erwin Piscator during his exile in Soviet Russia, France, and finally in the United States of America during World War II. The material, however, showed that Piscator's work in the US was of special importance among his works created in exile. Therefore, the research focused on his activities as the director of a Theatre School in New York City and on two presentations given at the annual conferences of the Japanese Society for Theater Research (JSTR). The latter presentation will be published as a research paper in the journal of the JSTR in Japanese.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：芸術学・芸術史・芸術一般
科研費の分科・細目：
キーワード：ドイツ　アメリカ　演劇　戦中　異文化　ピスカートア　ウィリアムズ　リヴィング・シアター

１．研究開始当初の背景

　第二次大戦中、ナチス・ドイツの全体主義的な文化政策に抗して亡命した演劇人が多数いたことはよく知られている。だが、彼らの亡命先での仕事の内容は、またその中でも、

演出家が行った仕事の内容は、ほとんど明らかにされていない。これには二つの理由がある。

第一に、彼らの仕事はしばしばドイツ語以外の言語でなされているということである。例えば、アメリカで英語によって計画・実現された仕事は、従来の（特に日本の）、ドイツ人がドイツ語で手がけた仕事を対象にする〈ドイツ演劇研究〉、アメリカ人が英語で行った仕事を扱う〈アメリカ演劇研究〉のどちらにも属さず、取り上げられないままになっている。そして第二に、従来の演劇研究が文学研究に依拠した戯曲研究を主流とし、演出家の仕事、即ち、上演作品が研究対象になること自体があまりないということである。

以上のような理由で、ドイツから亡命した演劇人の亡命中の仕事については、例えばブレヒトのように、亡命中でも劇作家・演劇理論家としての仕事を多くした者であれば、戯曲作品や作業日誌があり、これに関する研究がなされているが、ピスカートアのような演出家の仕事については、これまでほとんど研究されていないのが実情である。

ピスカートアの亡命期の仕事について知る手がかりとしては、彼自身が書きとめたものを集成した Schriften 1, 2 (1968)や、同時代人の手記がある（例えば、ソヴィエト・ロシア期の仕事を多くともにした Reich (1970)や、アメリカでの活動の道を開いた〈グループ・シアター〉の創設者 Clurman (1945, 58, 74)など)。また、ピスカートアの戦前・戦中・戦後すべての仕事を取り扱った Innes (1972)や Willett (1978)の研究がある。だが、これらの文献から得られる情報は、概要としてのもの、或いは、ごく断片的なものである。

そこへ近年、ピスカートアのソヴィエト・ロシア期の仕事について、ドイツの研究者たちが一次資料集や二次文献を多く刊行し、当時のピスカートアの仕事の詳細が次第に明らかにされてきている。一次資料集としては、ピスカートアの書簡や回想録、写真を整理した Haarmann (2002)や、1909～36 年の書簡をまとめた Diezel (2005)があり、二次文献としては、ピスカートアが同時代の（亡命）ドイツ人劇作家の劇作に与えた影響を検証する Haarmann (1991)がある。また、ソヴィエト・ロシアに亡命していたドイツ人による芸術活動全般を対象としたものとして、1932～37 年の当地での亡命ドイツ人の演劇を扱った Diezel (1978)、ソ連に亡命したドイツ人芸術家の活動全般を追う Jarmatz/Barck/Diezel (1979)、俳優ファレンティーンの書簡と書類を手がかりに 1935～37 年の亡命ドイツ人による当地での演劇を探る Diezel (編) (2000)、そして、亡命ドイツ人の芸術家たちによる 1933～45 年の書簡を集めた Haarmann (編) (2000)がある。さらに、Diezel (1993)はピスカートアが議長を務めた国際革命演劇同盟(IRTB/MORT)に関して、また Haarmann/Schirmer/Walach (1975)は、ピスカートアが先頭に立って進めた、亡命ドイツ人の演劇人による劇団・劇場設立計画について研究している。

その一方、アメリカでのピスカートアの仕事について知るための文献はなお非常に少ない。研究書としては Kirfel-Lenk (1984)や Probst (1991)、ピスカートアが教員として在籍した〈ニュー・スクール〉（彼は付属演劇学校の校長を務めた）の歴史を扱う Ruttkof/Scott (1986)、また論集所収論文として Krohn (1990)がある程度で、ピスカートアが当時計画・実現した仕事の具体的な内容はおぼろげなままである。

私は本研究に取り掛かるまで、主として、ピスカートアが亡命前、ドイツで 1920・30 年代に計画・実現した仕事、また同時代のドイツで制作されていた演劇を研究してきたが、研究を進めるうち、従来のピスカートア研究において、彼の亡命期の仕事、特にアメリカ期のそれが十分明らかにされていないことが、むしろより大きな問題だという印象を得た。ピスカートアに関する先行研究は、先述の理由で、亡命前と亡命中の時期を比べると、後者に関するものが圧倒的に少ない。しかも、これらは全て英語かドイツ語による研究で、日本語による研究は皆無である。彼の亡命期の仕事、特にアメリカ期のそれを追究し、同時代と後世の演劇への影響を明らかにすることが必要だと私は確信し、本研究を着想するに至った。

２．研究の目的

本研究の第一の目標は、上記の先行研究の不足を補い、亡命期のピスカートアの仕事が、どのような場で、どのような形で計画・実現されたかを明らかにすることである。またこれを手がかりに、他の亡命ドイツ人の演劇人たちの仕事を参照しつつ、どこでどれだけピスカートアの仕事が受容されたのか、またその仕事が、彼にとっての外国であるソヴィエト・ロシアとアメリカ、とりわけ後者の、当時および後世の演劇にどのような影響を及ぼしたのかを追究することを目指した。

３．研究の方法

上の目的を達成するためには、ピスカートアの亡命期の、特に演出作品に関する一次・二次文献を調査する必要がある。具体的には、ソヴィエト・ロシア期とアメリカ期、それぞれについて、先行研究を手がかりに、調査の必要な一次・二次文献を選び出し、これらの

資料を擁する図書館・資料館において現地調査を行う。調査先は二ヶ所、ひとつはドイツ芸術アカデミー（ベルリーン）の付属アーカイヴ Stiftung Archiv Akademie der Künste、もうひとつはアメリカ・南イリノイ大学（イリノイ州カーボンデール市）のモリス・ライブラリー Southern Illinois University (Carbondale), Morris Library である。2 年の研究期間において予定した作業の流れは以下の通りである。

（※なお、本研究を遂行する上で、ピスカートアが亡命前にドイツで行った仕事についての調査が大きな基盤となるが、これについてはすでに、この時期の彼の仕事に関する一次・二次資料を多く所蔵するドイツ芸術アカデミー（上記）で調査を済ませている。ならびに、本研究開始前の平成 19(2007)年度末、当時特別研究員として所属していた早稲田大学グローバル COE プログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」発行の紀要「演劇映像学 2007」に、研究ノート「芸術の衣をまとう〈政治演劇〉――演出家エルヴィーン・ピスカートアの亡命期の仕事――」を発表した。これは、先述の先行研究を整理しつつ、ピスカートアの当時の活動の概要を示すもので、本研究のいわば背骨となった）

【平成 20(2008)年度】

2008 年 4 月～9 月：ピスカートアのソヴィエト・ロシア期の仕事について、上述の先行研究の脚注・後注・参考文献一覧を手がかりに、上記二ヶ所の資料館・図書館が所蔵する一次・二次資料のうち調査すべき資料をリストアップする。

2008 年 10 月～2009 年 2 月：同じく、アメリカ期の仕事について、先行研究の脚注・後注・参考文献一覧を手がかりに、上記二ヶ所の資料館・図書館が所蔵する一次・二次資料の中で調査すべき資料をリストアップする。

2009 年 3 月：ドイツ芸術アカデミー付属アーカイヴで一次･二次資料を調査(約 1 週間)。同アーカイヴは旧東独の「ピスカートア・コレクション」と旧西独の「ピスカートア・センター」を備え、戦前から戦後にわたるピスカートアの仕事に関して、演出ノート、演出台本、舞台写真、プログラムほかの資料が収められている（資料幅総計 31 メートル、843 巻）。アメリカ期の彼の仕事に関しては〈ドラマティック・ワークショップ〉の運営に関する書類や教材を擁する（『ドイツ芸術アカデミー付属アーカイヴ所蔵資料一覧』(2003)、146 頁より）。

（※ドイツでの現地調査の際、対象の資料が予想外に多く、調査のための時間が十分にないことが判明する可能性があるが、その場合、アーカイヴのリストに記載されているデータを書きとめ、後日複写の郵送を依頼する）

【平成 21(2009)年度以降】

2009 年 4 月～7 月：ドイツ芸術アカデミーで調査した資料を整理、ピスカートアが演出した作品の分析を行う。

2009 年 8 月：アメリカ・南イリノイ大学モリス・ライブラリーで一次・二次資料を調査（約 1 週間）。対象の資料は同ライブラリーが持つ「ピスカートア・コレクション」（コレクションナンバー31）所蔵のものである。同コレクションは、書簡、手稿、制作のための参考資料、財務関係書類、広告資料、写真ほかを収め、195 ボックス、11 パッケージ、総体積 57.6 立方フィートを数えるが（同ライブラリーウェブサイトより）、このうちピスカートアのアメリカ亡命期の仕事に関連する資料を調査する（例えば次の人々との往復書簡：トルストイ原作『戦争と平和 War and Peace』(1942 年演出、ニューヨーク）の共同脚色者アルフレート・ノイマン Alfred Neumann;『オール･ザ･キングス･メン All the Kings Men』(1948 年演出、ニューヨーク）の原作者でピスカートアと共同で脚色を行ったロバート・ペン・ウォレン Robert Penn Warren ;『るつぼ The Crucible/Hexenjagd』（1954 年演出、ドイツ・マンハイム）の原作者でドラマティック・ワークショップに学んだアーサー・ミラーArthur Miller)。

（※ドイツでの現地調査の際と同様、モリス・ライブラリーで調査すべき資料が予想外に多く、当初予定した調査滞在期間が十分でないことが判明した場合、コレクションのリストに記載されているデータを書きとめ、後日複写の郵送を依頼する。）

2009 年 9 月～12 月：モリス・ライブラリーで調査した資料を整理し、これと並行して、ドイツ芸術アカデミーで調査した資料に基づいて行ったピスカートア演出作品の分析を補完する。

2009 年秋：学会発表あるいは論文の形で調査成果を発表。

2010 年 1 月～3 月：調査成果を総括し、論文で調査成果を発表。

４．研究成果

以上の計画に従って研究を開始、また進行させたが、2008 年 3 月に予定していたドイツでの調査は、調査先が急遽改修工事を決めたため、同年 9 月へ繰り延べた。代わりに調査前の準備をより充実させたが、それでも結果として、収集した情報の整理および研究成果の発表が遅れることになった。研究期間中に行うことのできた成果発表は、最終的に、ピスカートアがアメリカで公にした演技論を扱う学会発表 1 件（2008 年 6 月）にとどま

った。本研究の総括を行うことができたのは、研究期間終了後の 2010 年 6 月に行った学会発表、およびこれをもとに仕上げた雑誌論文（2011 年 2 月に掲載決定）においてである。このさい、ピスカートアのアメリカ期の制作が現地の作り手に及ぼした影響を、劇作家のテネシー・ウィリアムズを軸にして論じた。

本研究を通して得られた知見は次の通りである。ピスカートアの制作・演出方法の特徴は、戯曲に描かれた虚構の劇の世界の登場人物に加え、この世界を外から捉えて観客に解説する〈語り手〉を登場させること、また同様の目的で幻灯や映画を使用することにある。こうした工夫の背景には、観客が受動的な〈受け手〉の立場を離れ、また感情移入的な鑑賞の態度を変え、劇の内容を客観的に観察し、現実の生活世界についても考察するようになることを目指す、ピスカートアの意図がある。これらの工夫はアメリカでも実践されたが、中でも教え子であるウィリアムズの劇作にとって大きなヒントとなり、世界的に知られる彼の代表作『ガラスの動物園』(1942)の構成に活かされた（同作では主人公が語り手の役にもなり、また場面の表題が幻灯で示されたり、別空間の模様が映像で示されたりする)。ただし、このアプローチもピスカートアにしてみれば不十分だった。なぜなら、ウィリアムズの生み出した世界はなお虚構の劇の枠の中にとどまるからである（主人公は〈語り手としての主人公〉として示され、幻灯・映像も観客が生きる現実の生活世界に基づいてはいない)。この点を打破したのがピスカートアのもう一人の教え子、演出家のマリーナで、彼女が共同設立者として率いた〈リヴィング・シアター〉は、劇の世界と現実生活の世界を一体化し、後者に直接影響を及ぼす演劇の制作を志向した。このように、劇作家であれ演出家であれ、1940 年代に制作基盤を築いたアメリカ演劇の作り手に、ピスカートアは、虚構の劇世界、或いは演劇制度の〈外〉を構想に組み込むという、制作のための新たなアプローチを確実に示していた。

研究成果発表の時期は遅れたものの、これを公にしたさいの反響は大きかった。本研究は第一に、(1)劇作家ではなく、演出家の仕事を追究していることに加え、いわゆる〈ドイツ演劇研究〉や〈アメリカ演劇研究〉という従来の研究の枠組みをこえ、複数の文化圏を行き来した演出家の仕事を、その文化圏ごとに比較研究していることで、現在の演劇研究において非常に独創的である。従来の演劇研究の隙間にあって見過ごされてきた世界演劇史の一端を本研究が明らかにしたと言っていい。また第二に、本研究は、(2)〈ドイツ演劇研究〉や〈アメリカ演劇研究〉というように、言語別に縦割りにされた現在の演劇研究において、交流の乏しい研究者の間に新たなチャンネルをつくる意義を持っており、新たな共同研究の可能性を、また研究のための新たなアプローチを示すものでもある。以上二つの点で、本研究は、特に日本演劇学会での発表のさい、主にドイツ演劇と英米演劇の研究者に多大なインスピレーションを与えたことが確かだった。

〈異文化コミュニケーション〉という言葉が人口に膾炙するようになって久しいが、これは演劇研究に関して言えば、〈インターカルチュラル・シアター〉の術語で語られてきている。だがその追究は十分な広がりを見せているとは言い難く、特に日本ではまだ端緒に着いたばかりといった観がある。今後、他の複数の演劇研究者との共同研究を、本研究を足がかりに、同様のテーマで行いたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

萩原健「1940 年代のアメリカ演劇におけるピスカートアの影響　―　ウィリアムズの場合を軸として」（日本演劇学会「演劇学論集」、査読あり、52 号、2011 年、ページ数未定）

〔学会発表〕（計２件）

①萩原健「演劇の異文化接触、1940 年代のドイツとアメリカ―ピスカートア、ウィリアムズ、マリーナの場合―」（日本演劇学会全国大会、2010 年 6 月 27 日、明治大学リバティタワー）
②萩原健「〈Objective Acting〉――1940 年代のアメリカにおける演出家ピスカートアの演技論――」（日本演劇学会全国大会、2008 年 6 月 22 日、日本橋学館大学）

６．研究組織
(1)研究代表者
萩原　健　(HAGIWARA KEN)
明治大学・国際日本学部・講師
研究者番号：50409728

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：